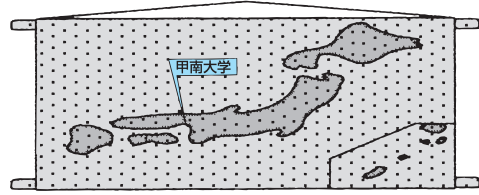


Zephyr

〈第88号〉

ゼフィール・にしかぜ


<https://www.konan-u.ac.jp/kile>

《特集＊言語や文化に関する現在の課題》

★所長からのメッセージ：ノーベル文学賞を受賞した韓国作家ハン・ガン	高 龍秀	2
〔フランス語〕フランス語の包括書法 (écriture inclusive) の是非をめぐって	中村 典子	3
〔中国語〕言語や文化に関する現在の課題	胡 金定	4
〔日本語〕日本語の残された言語問題	谷守 正寛	5
〔国際理解〕EUにおける言語や文化に関する現在の課題～多様性は維持できるのか?～	小西 幸男	6
おすすめの本		7
国際言語文化センターからのご案内		8

甲南学園創設者

平生飢三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」

「英語＋1（第2外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年2回刊行）

グローバル化と言語・文化の課題

国連人口基金によれば、全世界の人口は80億4,500万人であると報告されています。文化や言語は、国や地方によって違いがあることは容易に察することはできます。

お互いに理解をしあうためには翻訳を通じて言語として理解しあうことが一つの方法です。世界中で話者の多い言語の第1位は英語です。植民地であった国でも英語は話され、多くの国で英語教育を推進していることもあり、英語話者は19億人いると言われています。公用語として使われる言語を話者の多い順に第2位は中国語で14億7,700万人です。第3位スペイン語、第4位アラビア語、第5位フランス語、第6位ヒンディー語となっています。コミュニケーションには語学教育を通じて話者を増やすことを長年行ってきましたが、近年では、技術革新も進み、さまざまな翻訳アプリなども容易に使えるようになりました。語学を習得しなくても翻訳と音声化ができる便利な時代となりました。お互いを理解しあうためのツールは増えてきたということになります。しかしその一方で、言語はコミュニケーションの手段だけではなく、コミュニティのアイデンティティや価値観を反映しているため、文化とも密接な関係を持っています。現在約7,000ある言語のうち約半数近くが消滅の危機に瀕しています。グローバル化によって、大衆文化が世界中に広がり、そこに使用される言語の優位性がローカル文化の消失に拍車をかけたり、均質化を進めたりしています。国際的な共通語としての普及が進む一方、非英語圏の文化や言語の多様性が失われることで文化の喪失も危惧されています。

(小西 幸男)



ノーベル文学賞を受賞した韓国作家ハン・ガン

全学教育推進機構長・国際言語文化センター所長 高 龍秀

韓国の女性作家ハン・ガン（韓江）氏が2024年のノーベル文学賞を受賞しました。ノーベル文学賞の受賞は韓国人として初めて、アジア人女性としても初めてです。ノーベル文学賞を主管するスウェーデン・アカデミーは10月上旬、ノーベル文学賞受賞者としてハン氏を「肉体と精神、生ける者と死者の繋がりに対する独特な認識を持っており、詩的かつ実験的な文体で現代散文における革新家となった」と紹介しています。ここではノーベル文学賞を受賞したハン・ガン氏の作品を紹介します。

1970年に全羅南道光州市で生まれたハン氏は、短編『蒙古斑』で韓国の権威ある文学賞である李箱文学賞を受賞し韓国を代表する作家として注目されてきました。さらに、2016年には『菜食主義者』（2007年）がイギリスのマン・ブッカー国際賞を受賞し、国際舞台でも注目されることになりました。さらに済州四・三事件をテーマにした小説『別れを告げない』（2021年、日本語版は白水社）は2023年にフランスのメディシス賞外国小説部門などを受賞し、国際的な評価を高めてきました。

ハン・ガン氏の作品には様々な歴史的トラウマに立ち向かう人々をテーマにしたものがあります。2014年に刊行された『少年が来る』（日本語版の出版社はクオン）は1980年5月の光州民主化運動で犠牲になった人々の無念さ、生き残った人々のトラウマがテーマです。背景の歴史にふれると、18年間の長期独裁政権を続けた朴正熙政権が1979年に朴大統領の暗殺で崩壊すると、韓国では「ソウルの春」と呼ばれる民主化の動きが広がりました。これに対し軍部は戒厳令を宣布し民主化運動を力で封殺しようとし、それに抵抗した光州市の学生・市民に対して戒厳軍が苛烈な武力鎮圧を行い、2千名ともいわれる人々が犠牲者となった痛ましい事件です。その後の全斗煥政権下で、この光州民主化運動の背後操縦者として金大中氏に死刑宣告が出されました（その後に執行停止）。他方で1980年代後半に高揚する民主化運動に関わった人々がその後の大統領（金大中氏や盧武鉉氏など）や各界の要職になったこともあり、光州民主化運動は現在につながる歴史的できごとです。

1970年生まれで9歳まで光州市で過ごし、光州民主化運動の数か月前にソウルに引っ越ししたハン氏は、この作品を準備する過程で、膨大な人のインタビューを行います。そして、10代の少年少女も含む犠牲者の魂を作品の中によみがえらせ、その思いを語らせています。タイトルの『少年が来た』にはそのような意味があるのです。またこの作品は、人間の根源的な暴力性と崇高さという二面性を扱っています。緊迫する鎮圧作戦の中で、武器を持たない無垢の少年少女を無慈悲に殺戮する戒厳軍、他方で自らの命の危険を顧みず負傷者を懸命に助けようとする光州市民の姿、これらの描写から人間の本質が鋭く問われています。また、この民主化運動に関わり生き残った人々が、過去のトラウマに苦しみ、どう生き抜いてきたかなどが描かれています。

『別れを告げない』（2021年）の舞台となった、済州四・三事件にもふれておきます。38線南部だけの単独選挙が国家の分断をもたらすと反対した済州島島民の反対運動に対して、1948年4月3日に韓国軍などが無慈悲な鎮圧を行い、2万人ともいわれる犠牲者が出たできごとです。この作品においてもハン氏は現地での取材を積み重ね、単なる歴史小説でなく現代との対話の中でストーリーを展開しています。

ハン氏は被害者や主人公と自分を重ね合わせて作品を書いてきました。『別れを告げない』のメディシス賞受賞発表に当たって、「書く時は他のことができない。動くこともできない。歩くことも、食べることも、ままならない。最も受け身な姿勢で、書くこと以外のすべてを括弧の中にしまい込んだまま、言葉を一つひとつ書いていく。それ以外の方法はない」（『ハンギョレ新聞』2024年10月11日）と述べています。『すべての、白いものたちの』（2016年、日本語版は河出文庫）は、主人公が、生まれて間もなく死んだ姉に思いをはせ、姉に自分の人生を手渡してみるなど、死者に思いをはせること、死者と生きる者のつながり、かけがいのない人への愛などを問いかける作品です。

フランス語の包括書法(écriture inclusive)の是非をめぐって

国際言語文化センター兼任研究員 中村 典子

フランス語には、他のロマンス諸語と同様、名詞と形容詞に男性形・女性形、それぞれの複数形があり、フランス語を学習する学生は、最初に次のような表現を学びます。

① Je suis étudiant.	僕（男性）は学生です。
② Je suis étudiante.	私（女性）は学生です。
③ Nous sommes étudiants.	僕たち（女性を含む場合あり）は学生です。
④ Nous sommes étudiantes.	私たち（女性のみ）は学生です。

③の複数形の場合、男性がひとりでも含まれている場合は「総称」として男性形の複数形を使うという規則があるため、女性が含まれていても男性形の複数の étudiants を用います。こうした規則などが「女性の存在を無視している」と考える人々から問題視されるようになり、男女平等の観点から新しい書法が検討されるようになりました。

2015年11月、フランス首相の独立諮問機構である女男平等高等評議会（Haut Conseil à l'Égalité entre les femmes et les hommes）が作成して公開した小冊子『性的ステレオタイプ（固定観念）のない公共コミュニケーションのために：実践ガイド』（Guide pratique : Pour une communication publique sans stéréotypes de sexe）が「包括書法」（écriture inclusive）の発端となりました。「言語はさまざまな表象の中で最も重要な役割を果たしている。それゆえ、言語の上での女性差別をなくすことは、女性・男性間の平等を推進するために本質的なことである」¹として改革を提案したのでした。

この小冊子の中で、以下の〈色枠1（同書 p.16）〉の右側の書法が推奨されています。フランス語では、日本語の「・」（中黒）にあたる文字（point médian）がほとんど使われないため、PC（Windows）とMacでの打ち方まで〈色枠2（同書 p.17）〉で示してあるという周到さです。中黒が打てない場合はハイフン（-）でもよいとも書かれていますが、右上に筆者が示した例のように、ピリオド（.）やスラッシュ（/）を使った例のほか、フランス語の文法教科書でも使われてきた括弧（ ）の例もあります。こうした「男女形省略併記法」（筆者の造語）のほか、il「彼」でも elle「彼女」でもない、新しい中立の代名詞 iel, iels（同書 p.21）までもが提案されていて唖然としました。

この方針に沿って2017年9月、Hatier社が小学校の教科書を作ったことが大論争を巻き起こしました。同年10月26日、アカデミー・フランセーズ（Académie française：フランス語の辞書などを編纂し、

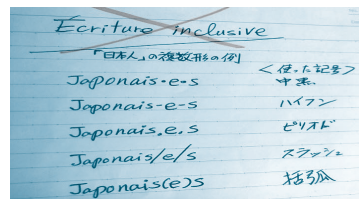
フランス語の標準化を行う国の機関）が包括書法の危険性を表明し、それを受けて、同年11月21日、政府は官報（Journal officiel）などでの包括書法の使用を禁止し、2021年5月5日、国民教育省大臣が、書かれた言葉を発音したり読むことができない、と教育現場での「男女形省略併記法」に反対しました。そして、2023年10月30日に上院（Sénat）にて、「包括書法と言われる偏向からフランス語を守るための法案」（Proposition de loi visant à protéger la langue française des dérives de l'écriture dite inclusive）³が賛成221、反対82で採択された結果、包括書法は基本的に「禁止」ととなりました（公的文書での使用は論外、商業文書や取扱説明書などでの使用も禁止）。

とはいえ、インターネット上や個人のメールなどで、男女平等を標榜する人は好んで使うようです。この件がきっかけとなり、2019年、アカデミー・フランセーズが、女性形がなかった職業名詞の女性形を容認したのは喜ばしきことです。「教授・先生」は男性形の professeur のみでしたが、女性形 professeuse を認めたのです（ただ、professeuse を使う人もいます）。

言葉は時代とともに変化していきますが、思想的なバイアス（この場合、男女平等への偏向）が、「国語学習に困難を与えてはならない」というのが多くの学者や政治家の見解でした。そういえば、日本語でも「スチュワーデス」「看護婦」といった単語は、性別による職業名の区別撤廃により2002年以降、使用されなくなりました。可能な範囲で、言葉の上での「男女平等」が世界的に進んでいると言えましょう。



〈ダウンロードできる『実践ガイド』〉²



〈筆者が書いた包括書法の例〉

Exemples :
Plutôt que « l'étudiant », écrire « l'étudiant·e » ;
Plutôt que « les citoyen·ne·s », écrire « les citoyen·ne·s ».

〈色枠1（同書 p.16）〉

Le point médian sur PC : Alt + 0 + 1 + 8 + 3
Le point médian sur Mac : Alt + Maj + F

〈色枠2（同書 p.17）〉

1 < <https://www.egalite-femmes-hommes.gouv.fr/guide-pour-une-communication-publique-sans-stereotype-de-sexe> >

2 < https://www.haut-conseil-egalite.gouv.fr/IMG/pdf/guide_egacom_sans_stereotypes-2022-versionpublique-min-2.pdf >

3 < <https://www.senat.fr/travaux-parlementaires/textes-legislatifs/la-loi-en-clair/proposition-de-loi-visant-a-interdire-lusage-de-lecriture-inclusive.html> >



言語や文化に関する現在の課題

国際言語文化センター兼任研究員 胡 金定

文部科学省「高等学校等における国際交流等の状況について」によりますと、日本の高等学校の中国語教育機関数は2009年をピークに減少傾向にあり、中国語履修者数も2012年のピーク（学習者：542校、22061人）に減少傾向にあります。2021年457校、学習者は17847人になりました。

日本の大学における中国語の履修者数は、近年、中国経済の発展などに伴い毎年約16万人にのぼっています。

大学における中国語教育は、専門教育と一般教育の2つに大きく分けられます。専門課程として中国語学科がある大学は約40校あり、その学科を専攻する学生は毎年約3,000人程度です。一般教育とは、大学に入学して初めて学ぶ外国語（初修外国語）を指します。日本国内で中国語を勉強している人の数は、2022年12月時点の調査によりますと、約28万人です。

一方、中国では日本語を勉強している人が約95万人と、世界で最も多く、インドネシアの約74万人を大きく上回っています。中国における日本語教育の特徴としては、高等教育段階の学習者数が最も多く、中・上級レベルに達する学習者が非常に多いことが挙げられます。

日本国内で中国語を学習する理由は、次のようなものを挙げるすることができます。

ビジネスやキャリア、観光などの分野で役立つ可能性があること、中国語圏は急速に拡大しており、中国の中流階級の成長はビジネスや経済分野に大きな影響力を持っていること、中国の古代文化は5000年以上も古く、中国の言語や文献、哲学、政治は世界の傾向や情動に重要な役割を果たしていること、中国語は話者数が多いため、世界中の人々とのコミュニケーションが可能となること、中国語は習得も比較的容易であること、日本国内でも中国出身の方と出会う機会が多く、学んだ中国語を実践できる可能性が高い街中で中国語表記の看板や中国語でのアナウンスに触れる場面が多く、日常の中で中国語を学べる機会が多いこと、中国の文化、歴史、伝統についての理解が深まり、異文化間のコミュニケーションと理解が促進されること、中国語を異文化として知ることによって日本への理解もより深まることなどです。

文化とは、最も広くとらえますと、人間が自然とのかかわりや風土の中で生まれ育ち身に付けていく立ち居振る舞いや、衣食住をはじめとした暮らし、生活様式、価値観など、人間と人間の生活にかかわることの総体を意味します。

異なる文化は交流することにより進歩していき、文化の交流は、それぞれの文化に深さや広さをもたらすものであり、その結果、総体としての人類の文化が発展してきたと言えます。

今後、世界が共存していくためには、各国、各民族が互いの文化を尊重し、多様な文化を認め合うとともに、文化交流を通じて、国境や言語、民族を超えて、人々の心を結び付けることによって、世界平和の礎を築いていくことが極めて重要です。

文化の交流に当たっては、まず、自らの歴史と伝統を理解し、自己のアイデンティティーを確立しなければなりません。他の文化を理解するためには、自己の文化を知らなければなりませんし、自分という軸がしっかりしていなければ、他の文化を無秩序に受け入れることにもなりかねません。また、自己の文化の持つ良い点を相手に分かりやすく伝えるためにも、自己の文化についての理解を深めることが必要です。こうした中で、他の文化に対する寛容や尊敬の気持ちが育まれます。

また、日本の文化を支えてきた母語としての日本語を大切にし、継承・発展させていくことは極めて重要です。グローバル化が進む中で外国語の能力を身に付けることの重要性が言われていますが、そのためにも、まず、母語で自分の意思を明確に表現できる言語能力を涵養する必要があります。

言語や文化に関する課題について

- ① 異なる言語や文化を持つ人々との意思疎通の問題：グローバル化の進展により、異なる言語や文化を持つ人々との交流機会が増えています。そのため、多様な言語が活発に使われることが相互理解の前提とされています。
- ② 外国文化への理解の不足：日本人の多くは、外国の言語や宗教、価値観などに対する知識や理解が十分ではありません。そのため、外国人住民の生活習慣や信仰を尊重し、必要な支援を行うことが難しい現状があります。
- ③ フォーマルな場面での言葉遣いの課題：改まった場でふさわしい言葉遣いができていないという課題が、社会全般と個人で多く挙げられています。
- ④ 英語教育及び他の外国語の問題：日本の英語教育及び他の外国語では、音声学習が不足したり、受験対策が重視されたり、学習時間が不足したり、外国語を使う機会が少なかったりといった問題があります。



日本語の残された言語問題

国際言語文化センター兼任研究員 谷守 正寛

言語の研究においてはもちろんまだまだ課題として残っているものはあります。それらは考察する際の視点によってさまざまな表れ方がします。筆者の場合は構文に関心があり残された課題を解くのに関心があります。そんな中でいくつかを取り上げて例証します。

まず現代言語学では名詞文「AはBだ」というものをどう扱っているかですが、第一に挙げられるのが指定文といって「 $A = B$ 」という関係にある文です。これは「BがAだ」と逆に変換しても等価だとされます。しかしたとえば数学的に等価な「 $1 + 1$ は2」は指定文になりそうですが、逆にして必ず「2は $1 + 1$ 」でなければならないとは限りません。「2は $3 - 1$ 」かもしれません。ひっくり返してもまったく等価な名詞文はないと思われます。逆にする時に「は」を「が」にするという規則がありますが同じことでしょう。

「太郎は人間だ」のようにAの属性をBが表す名詞文「AはBだ」は措定文と呼ばれます。これは逆にして「人間は太郎だ」とはなりません。「 $1 + 1$ は2」は措定文かもしれません。以上の2つタイプが最も基本的な名詞文とされています。

さて「僕は鰻だ」と言えば「君は牛にするか。僕は～」といった状況で出る名詞文でウナギ文と呼ばれます。そして「鰻だ」の「だ」が「僕は鰻を食べる」の「を食べる」を代用しているというのが述語代用説です。「だ」が「格助詞など+動詞」の代わりをしているというわけです。日常なにげに口に出てくるような「トイレは二階だ」といった文も実はウナギ文で「だ」は「(二階)にある」を代用していることになるかとされます。しかしここが大きな問題で、別に「だ」がなくても言えるので「だ」は構文に関係ありません。千年前の文「春はあけぼの」も「春はあけぼのがよい」と意識されるウナギ文ですが、「だ」(古語では「なり／ぞ」)が表記されていません。つまりただ一つ残る文法機能をもつ語「は」が鍵を握っています。万葉集にはすでに「秋山我は」という表現があり、これは「我は秋山」の倒置で「私は秋山を好む」という意ですからウナギ文です。「は」の構文力によるこうした名詞文は実は古来より存在したことになります。そしてこれが現代言語学では論理的ではないという理由で異端視されているのが、筆者にとっては残る課題なのです。ウナギ文はむしろ日本語の第一に挙げられるべき名詞文でしょう。古来より喚体句といって体言句で投げ出す表現が日本語にあって、和歌や俳句に限らず体言止めはなお残存します。体言で締めない「これは、寝すぎた、しくじった」という文も「これ」と残る述部の動詞との間に論理的な格関係がないことから三上章などによって雑例扱いされていますが、これもごく自然なまものの日本語なのです。「トイレは二階」といった自然な日本語が、言語辞典などでは名詞文にも加えてもらえないといった冷遇を受けていて、正統な文法の番外地に放置されているのが現状です。これはたとえば比較的最近の論文集『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』(平成十年)に都合よくこの2つについて「『うなぎ文』について」と「春はあけぼの一構文要素の文章論的解釈」という論文が載っていますが、いずれも問題点を指摘しながらも決定的な解決には至っていないさそうであることから分かります。

また「ハーガ構文」といって「象は鼻が長い」のような表現も解決していると言いがたい構文です。それは主語が2つあるようにみえるのが理由です。ふつう他の言語では「象の鼻が長い」のように「象の鼻」と言いますから、表面上は日本語でも「象の鼻」が理屈に合うので「象は」の「は」が「象の」の「の」からきていと言われます。しかし表面的にはそう思われても属格を示す「の」が、主題を示し強力な構文力をもつ「は」に成り下がるとは信じがたいものです。たとえば同じ属格を示す「の」を用いて「私の車が高い」を同様に変えて「私は車が高い」などとは言えませんから、「象の鼻が長い」が元の形だと言うのは都合のよい論法です。さらに「鼻は象が長い、首はキリンが長い」となると即座に「は」はどこから来たのかという疑問が起きます。「～の鼻」から来たり「象の～」から来たりとその都度恣意的に説明されるようでは「は」の原理に辿り着けないのが現状なわけです。したがって主語が2つあるようにみえる「AはBが～」という文のAとBは本質的には切り離して考えるべきものですが、その理論的説明が厄介なところなのです。



EU における言語や文化に関する現在の課題 ～多様性は維持できるのか？～

国際言語文化センター兼任研究員 小西 幸男

EU はヨーロッパの経済復興と平和の確保をするための壮大な構想の元に欧州の国々が加盟を繰り返し、第2次世界大戦後に前身である欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSC) や欧州経済共同体 (EEC) を経て最初は6か国で始まった共同体は現在 27 か国が加盟する欧州連合 (European Union) となりました。

言語や文化の違う国々が他の経済圏に劣ることのない連合をして経済再建を目的とするために、国内の政策にも影響する協力を進め、共同市場の形成や貿易の自由化を進めました。経済協力体として貿易の自由化を進めるためにさまざまな障壁を取りはらってきました。多岐にわたる政策分野を加盟国間で協議をすすめ、憲法や社会的な環境をあらゆる階層で協調させるために政策を進め、ヨーロッパの統合を行ってきました。加盟国はそれぞれに主権を維持し、文化や言語の違った背景を維持しながらも、EU の域内であれば、加盟国間で人、モノ、サービス、資本が自由に移動できる4つの「移動の自由」を保障することで単一市場を成立させ進めました。これにより、EU 市民は住む場所も働く場所も自由に移動できることになり、国を超えて就学することも自由になりました。その過程で教育や習慣に関しても協調できるように多くの工夫を重ねてきました。地域的な協力と国際的な影響力を強化させる目的でグローバル化を促進したとも言えます。

EU 統合のプロセスでは、加盟国に民主主義、人権、法の支配を強化させるために西側諸国だけでなく、東欧諸国に関しても冷戦後に政治改革や人権に対する考え方の改善なども行いました。それにより、共通の価値観を共有することにもなりました。

EU は多国籍・多文化・多言語の共同体であるので、統一性のバランスをとる課題に対しては多様性を尊重する姿勢をとってきました。一方では各国の言語は平等に扱われるように24の公用語を採用していますが、実際には英語、フランス語、ドイツ語などがEU域内で広く使用されていることから業務での共通言語として使われています。

EU 域内では各加盟国内にも標準語と地域言語や少数言語が存在していますが、真の多言語主義の実現は難しく、言語は文化や民族のアイデンティティの重要な要素であるのですが、実際には文化的社会的な背景を大切に保全しながら言語の存続を維持することは難しくなっています。EU としては欧州地域言語憲章を通じて少数言語を支援する取り組みなどを行っていますが、グローバル化が進み、若い世代では英語圏の文化やメディアの影響を受けて、地域ごとの独自の文化形成から均質的な文化形成へと変化しており、そのトレンドはますます加速する傾向にあります。ヨーロッパ固有の文化を保護する政策も取り組まれています。難しい課題となっています。地域的な独自の文化を維持、保存しながら共通の欧州のアイデンティティを形成することをEUでは理想としていますので、文化交流や異文化理解が進むような教育も行われています。歴史的にも文化的に異なる国と国民が共存するEU域内では共通のアイデンティティを形成し確立することは大きな課題となっています。近年では、さらに政治的な理由もあり、移民の受け入れが進み、これまでの加盟国としての徐々に協調を目指した言語と文化の共生に新しい挑戦を突き付けることになっています。移民は帰属する地域や国を持たないままEU域内に新しく言語と文化のダイナミズムを急速に流入させています。EUでは加盟国の増加のたびに経験を重ね、協調を目指してきた経験はありますが、移民の言語や文化を尊重する基本的な姿勢に変化はないものの、全く違った背景を持つ移民のコミュニティが文化的にも言語的にも共生していく環境を作り出す政策を作り出すことは決して容易ではありません。これまで移動の自由化により共存を目指したEUに移民のコロニーといった国の中に小さな別の自治区を形成するような状況が現在のEUの課題となっています。言語の多様性を維持し、文化的アイデンティティの保護や維持、移民も含めた多文化共生の促進など、どのように欧州全体で統一性を保ちながら、多言語主義と多文化共生を政策として進めていくかがヨーロッパでは大きな課題となっています。



老子漫画『わかつォ！老子道－生き残るための老子の知恵』

(原案・胡金定 原作・ルノアール兄弟 作画・楨村遼司) DB コミックス

日本の若者に老荘思想に親しんでもらおうと、胡金定が、中国古典『老子』をもとに原案を作成した電子書籍 (Kindle 版) 漫画『わかつォ！老子道－生き残るための老子の知恵』(DB コミックス)がこのほど出版されました。儒教と並ぶ中国思想の入門書として注目されています。

中国・春秋戦国時代 (紀元前 771 ～ 紀元前 221 年) の思想家として知られる孔子や孟子が中心となった儒教が、「仁」「義」「礼」「智」「信」といった社会の秩序のうえであるべき人の道や思いやりの姿勢などを模索するのに対し、道教は「自然」を尊重しながら、幸福を希求する「老荘思想」を宗教化したもので、中国の社会形成などに長く関わり、日本を含むアジア全体にも広く影響を与えました。

本書は主人公である一人暮らしの OL・田尾 (道＝タオ) はるかのもとに、ある日、老子型ロボットのロッキーが宅配便で届き、ストレスフルな現代社会を生きる田尾の対人関係や、生活態度などの事例に沿って、こうした老子の思想を、ギャグを交えながら紹介するというストーリー展開です。

『老子道德経』は名言の宝庫としても知られており、例えば日本酒の銘柄にも使用されている「上善水の若 (ごと) し」には、「水は善く万物を利して争わず」という言葉が続く。最上の善とは水のように混じり気がなく淡いものでありながら、万物にこの上ない恵みを与え、かつ他とは争わず、自らは低い位置に身を置く、という、老子の生き方を知るための鍵となる言葉です。

他にも「無為自然」「足るを知る」「吾唯足知」など、日本人にも馴染みの深い名言が『老子道德経』には多く含まれており、多くの人にとって興味深い書です。

老子に親しむことで、理想の生き方を考えるヒントが得られ、他者とのコミュニケーション能力の向上や、グローバルな比較文化の視点、日本語能力の育成にもつながります。さらに、苦から楽へ、大きく転換させるチャンスが人生にはあることを気づかせてくれるはずです。

なお、BUSINESS INSIDER「アジアから見る世界」The News Lens Japan に掲載されている文章を参照したものです。(胡金定)

『実例詳解古典文法総覧』 (小田 勝)

和泉書院

文法は苦手か好きじゃないという人が多いと思いますが、あえて古典文法の本をおすすめします。日本語の現代文法のいまだ悩ましい問題を考える中で、それを解く鍵となるものが実は古文の中に潜んでいるとみるのは自然なことです。なぜなら古代から日本語の文法は現代までつながってきていて、現代語になった時に古語から遮断されたわけではないからです。口など身体的な使い方や社会情報に応じて比較的短期間で変化する発音や語義・語法と違って、脳内深く組み込まれた文法のしくみは変化するのに数百年単位の時間がかかります。

さてこの書は従来の文法書と違って品詞や文法のカテゴリーで分けられていて、英文法書のような感覚で文法カテゴリー別に調べることができるので、比較的容易に古典文法や古語の用法を知ることができます。たとえば過去の出来事を表す語を調べたければ、「テンス、時間表現」といった項目から「き」や「けり」といった語が検索できます。

中でも筆者が注目するのはうなぎ文という項目で次のような例が挙げられていることです。

秋山そ我は (万葉集、一六)

この宮は素盞鳴尊なり (東関紀行)

一品宮はすぐれたる御琵琶の音にぞおはしましける (恋路ゆかしき大将)

順番に「我は秋山だ」(万葉集には「そ」はなし)、「この宮は(祭神の)素盞鳴尊だ」、「一品宮はすぐれた琵琶の音色であった」といううなぎ文をなします。これらはすべて論理的に主語と述部の内容が同定できない関係にあります。例文以外にはうなぎ文の成り立ちの説明が載せられていないため統語論的な解釈は定説もなく定まりませんが、これはうなぎ文を古来より基本的な名詞文をつくる構文とみる筆者の研究のサポートにもなる意義のある指摘です。

こうした従来では見過ごされてきた文法事項を古典でありながら取り入れた斬新な編集になっています。『現代語古語類語辞典』を併用すればきっと上代や中古の日本語で歌や文をつくることもできるようになることでしょう。(谷守正寛)

国際言語文化センターからのご案内

言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会

国際言語文化センターでは、外国語・国際言語文化に関する調査・研究を行っており、年2回の全体研究会を開催しています。

この度、第56回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会の開催が決定いたしました。

◆開催日時：2025年2月8日（土） 10：30～12：00

◆開催場所：甲南大学 岡本キャンパス 2号館4階 241講義室

◆講師：張軼欧（チョウ イツオウ）氏（鳥根県立大学 国際関係学部 准教授）

◆講演タイトル：「是…的」文の誤用と教授法

「是…的」文は日本語話者の中国語学習者にとって、習得しにくい文法項目の一つである。本発表は、主に日本語話者の中級および上級レベルの中国語学習者を対象に、彼らの「是…的」文における主な誤用パターンを基に、誤用の原因を分析し、これらの学習者に適した教授法を提案するものである。また、本発表では、「是…的」文の使用条件を明確にするとともに、「是…的」と「了」の用法の違いについても言及する。

※申込方法などの詳細は甲南大学ホームページにて公開いたします。

国際言語文化センター講演会

学生・社会人の方々に国際交流や言語・文化についての理解を深めていただく機会を提供するため、年2回の講演会を開催しています。

※日程その他の詳細は甲南大学ホームページにて公開いたします。

生涯学習講座

甲南大学リカレント教育センターと連携した社会人講習会『言語講座』や公開講座など生涯学習を開催しています。

社会人講習会『言語講座』

英語・ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語の言語講座を開催しております。

〈前期〉

講座期間 4月～8月

募集期間 3月

（土曜日・全10回）

〈後期〉

講座期間 9月～2月

募集期間 7月～8月



※詳細は甲南大学リカレント教育センター HP [公開講座] を参照ください。